Practicing Japan.

35 years of Japanese Studies in Poznań and Kraków

ポズナン & クラクフ 日本学専攻科設立 35 周年記念学会

Practicing Japan. 35 Years of Japanese Studies in Poznań and Kraków

ポズナン＆クラクフ日本学専攻科設立35周年記念学会

Practicing Japan. 35 Years of Japanese Studies in Poznań and Kraków

ポズナン＆クラクフ日本学専攻科設立35周年記念学会

Edited by
Yuki Horie, Hanna Jaśkiewicz, Iga Rutkowska, Patrycja Duc-Harada, Damian Duduś, Stanisław Meyer, Anna Trzaska, Estera Żeromska

wydawnictwo

Poznań 2023

Projekt okładki:
Kamil Burkiewicz

Recenzja:
prof. dr hab. Ewa Pałasz-Rutkowska

Korekta:
Graham Crawford
Chihei Nishio

© Copyright by:
Autorzy

© Copyright by:
Iga Rutkowska

© Copyright by:
Wydawnictwo Rys

Wydanie I
Poznań 2023

ISBN 978-83-67287-73-9

DOI 10.48226/978-83-67287-73-9

Wydanie:

Wydawnictwo Rys
ul. Kolejowa 41
62-070 Dąbrówka
tel. 600 44 55 80
e-mail: tomasz.paluszynski@wydawnictworys.com
www.wydawnictworys.com

This volume is a collection of articles presented at the international conference "Practicing Japan – 35 Years of Japanese Studies in Poznań and Kraków", held on March 24–26, 2022. This conference was jointly organized by the Department of Japanese Studies at Adam Mickiewicz University in Poznan and the Department of Japanese Studies and Sinology at Jagiellonian University in Krakow. The two Departments were established simultaneously in 1987, and over 35 years they have transformed into thriving centers of research on Japan. Previously, Japanese studies in Poland had been conducted only at University of Warsaw.

The opening of Poland to contacts with Japan after the fall of communism in 1989 unleashed a huge wave of interest in the country, which has continued uninterrupted to the present. One measure of this interest is that Japanese studies in Poland breaks records for popularity among college applicants every year. The Polish Japanese Studies community has transformed from a small group of scholars into a large community of researchers specializing in Japanese literature, language, history, culture, political and social sciences. The "Practicing Japan..." conference reflects the transformation that has taken place in Polish Japanese studies over the past three decades. Although it was held under the conditions of the COVID-19 pandemic, it was attended by more than 100 scholars from around the world.

The organization of the conference, as well as the publication of this volume, would not have been possible without the generous support of the Japan Foundation, for which the organizers express their sincere thanks.

Prof. Estera Żeromska, Adam Mickiewicz University
Dr hab. Stanisław Meyer, Jagiellonian University

本誌は、2022年3月24日から26日に開催された国際研究学会「Practicing Japan – 35 Years of Japanese Studies in Poznań and Kraków」で発表された論文を総括したものです。本国際研究学会は、ポズナン・アダム・ミツキェヴィチ大学日本研究科及びクラクフ・ヤギェロン大学日本中国学科により共同で開催されました。上記の二つの学科は、1987年に両大学で同時に設立されました。それまでのポーランドにおける日本研究はワルシャワ大学でのみ行われていましたが、両学科は、設立後35年の年月を経て新たな日本研究の活動の場として大きい発展を遂げました。

1989年の共産主義崩壊後、ポーランドが日本との国交を深めたことをきっかけに、ポーランドにおける日本への関心が急速に高まり、それは現在まで途絶えることなく続いています。日本に対する関心の尺度として挙げられるのは、ポーランドの大学における日本学科志願者が年々飛躍的に増え続けていることです。ポーランドの日本研究は、当初、学者による小規模な組織でしたが、現在は日本文学、言語、歴史、文化、政治及び社会科学を専門とする研究者による大規模なものになりました。「Practicing Japan – 35 Years of Japanese Studies in Poznań and Kraków」は、コロナ禍における開催ではありましたが、世界中から100名以上もの学者の方々にご参加いただき、過去30年間のポーランドにおける日本研究がどのように変貌を遂げていったのかをまさに反映した学会であったと言えるでしょう。

なお、本研究学会の開催及び本誌の出版は、国際交流基金の寛大な支援なくしてはあり得ませんでした。開催者一同心から御礼を申し上げます。

学会開催委員長
Estera Żeromska 教授、ポズナン・アダム・ミツキェヴィチ大学
Stanisław Meyer 准教授、クラクフ・ヤギェロン大学

Contents

Part I: Language, linguistics, education 9

Andrej BEKEŠ
WA-marked topic in Japanese: from local enigma to discourse delimiter..... 11

Patrycja DUC-HARADA
Calques in Modern Japanese – Classification and Main Factors Determining Their Occurrence 27

服部真子　*Shinko HATTORI*
発音学習を効果的に授業に取り入れるために―
教材は授業をどう支援するのか―..... 43

井上博文　*Hirofumi INOUE*
小学校国語科教科書の対人評価語彙の傾向性と語彙構造..... 57

Arkadiusz JABŁOŃSKI
Locative or dative? The adnominal (case) marker *-ni* in contemporary Japanese..... 73

グラジナ・クラム　*Grażyna KRAMM*
対馬方言に見られる九州方言の要素..... 89

森田耕司　*Koji MORITA*
ポーランド語のアスペクト体系から見た日本語のテイル形..... 99

James Harry MORRIS
Japanese Texts in the Digital Age: Thoughts on New Possibilities in the Transcription of Pre-Modern Japanese 119

小熊利江　*Rie OGUMA*
ロシア語母語話者による日本語の母音の曖昧化とその習得過程..... 123

Irena SRDANOVIĆ, Harumi KASEDA
Practical activities in vocational education for foreign students of Japanese..... 135

Kazuko TANABE
On the Use of *de+irassharu* and *de+orareru* in Spoken Japanese..... 147

Part II: Literature, theatre, film, arts 165

Damian DUDUŚ
Hori Tatsuo's (1904–1953) Essays on the Works of Marcel Proust (1871–1922)..... 167

Mami FUJIWARA
Re-reading Lafcadio Hearn's Short Fiction, *Ningyō no haka*, Applying Jack London's Interpretation of Hearn's Understanding of Japanese Culture..... 183

原田香織　*Kaori HARADA*
能楽の文学性に関する諸問題 一 現代の新作能に関する一考察 一 193

Agnieszka KAMROWSKA
Anime Landscapes and Real-life Places 205

加須屋明子 *Akiko KASUYA*
旅と芸術―東影智裕を中心に 217

Kinga LASEK
Tokyo – the city of wanderers in the early 1920s as seen through the eyes of *Diary of a Vagabond's* protagonist 237

Samuel L. LEITER
Parting the Bamboo Curtain: Kabuki Invades Chinese Stages, 1955 and 1960 255

西口拓子　*Hiroko NISHIGUCHI*
翻訳文学の挿絵の系譜 269

園山千里　*Senri SONOYAMA*
『うつほ物語』の手紙 287

Part III: Law, politics, society 297

谷口龍子　*Ryuko TANIGUCHI*
コロナ禍における首相記者会見演説の批判的談話研究
―人称表現と発話の機能との関係を中心に― 299

横田葉子　*Yoko YOKOTA*
中国人若者世代の意識調査　2022年―中国人留学生を対象に― 311

Part IV: History, religion 323

Zuzanna BARCZYK
Understanding a *mon* – Japanese heraldry and its significance 325

Sven OSTERKAMP
A hitherto unknown Jesuit confessionary in Japanese language and script (ca. 1595) kept at Utrecht University Library 339

Krzysztof STEFAŃSKI
On *Hagakure* and other "sanctities" – a crooked mirror image of Japanese history 351

Abstracts / 要旨 363

ロシア語母語話者による日本語の母音の曖昧化とその習得過程

ルーヴァン・カトリック大学
小熊利江　*Rie OGUMA*

キーワード：第二言語習得、音韻の範疇設定、困難度の順序、ロシア人大学生、日本語音声教育
Keywords: second language acquisition, phonological categorization, order of difficulty, Russian university students, instructing Japanese phonetics

1. 背景

日本の隣国ロシアにおける日本語教育は200年以上前から行われており、長い歴史を持っている。ロシアで学習者数の最も多い[1]、高等教育機関における日本語教育の現場では、主に文献講読や翻訳、文法学習などが重視され、コミュニケーション能力に関わる音声教育はあまり行われていない[2]。またロシアの日本語教師の多くを占めるロシア語母語話者　(以下、「ロシア人」とする)は、日本語の音韻には難しい発音が少ないので特別に指導する必要はないと考えている。これは、教師自身が日本語の発音について学習した経験が少ないことも一因だと考えられる。渡辺(2011)[3]　の研究では、ロシア語圏の日本語教師には学習者に音声指導を行うための十分な知識がなく、学習者のニーズに応えられていないと指摘されている。
しかしながら、ロシア人の日本語の発音の問題は、単音レベルの調音に関するものが多いのだろうか。つまり、1つ1つの母音や子音の発音が容易であれば、発音指導は必要ないと言えるのだろうかという疑問がある。それに関して、まず実際にロシア人による日本語の発音の不自然さにはどのようなものがあるか、調査を行う必要がある。本研究では、教師や学生の内省や印象ではなく、実際の発話データをもとにしてロシア人による日本語の発音習得上の特徴や困難点を実証的に明らかにし、音声教育に役立てたい。

1　国際交流基金．2021．「ロシア　(2019年度)」．https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/russia.html.
2　藪崎義雄．2006.「ロシアにおける日本語教育の現状と問題点」.
3　渡辺裕美．2011.「ロシア語母語話者の発音の特徴と指導における問題点－日本人日本語教師に対する調査から－」.

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の3点である。
1）ロシア人による日本語の発音の不自然さの全体的な傾向を明らかにする。
2）ロシア人による単音レベルの発音の不自然さについて、どのようなものがあるかを明らかにし、その原因を分析する。
3）ロシア人にとって発音が困難な音声特徴について、日本語能力レベル別の習得状況を明らかにし、その習得過程を予測する。

3. 調査の概要

モスクワの大学にて日本語を学習しているロシア人に1人ずつインタビューを行い、発話の音声データを収集する。音声データの収集方法は、「I–JASコーパス」[4]　の手順に沿って行う。調査の対象と音声データの内容は、以下の通りである。
対象：モスクワの大学で日本語学を専攻するロシア人51人。学習者の日本語能力レベルはJ–CAT[5]テストで測定する。
音声：自然発話スタイルの独話である5コマ漫画のストーリーテリング[6]

4. 音声データの評価方法

ロシア人の発話の音声データについて、音声学の専門家3[7]人に発音の自然さの評価を依頼する。評価の方法は、以下の通りである。
1）各学習者の音声データを聞いて、発音の自然さの総合評価を「良くない」から「良い」までの5段階で評価する。
2）発話中の発音の不自然な個所を抜き出し、その不自然度を4段階で記す。不自然度が低いものは1点、高いものは4点とする。
上記の方法によって評価された結果を集計する。[8]　その際、アクセントについてはバリエーションが多いため除外する。

4　迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬．2020．『日本語学習者コーパスI-JAS入門』参照。
5　J-CATの詳細は「http://www.j-cat.org/」を参照。
6　学習者には、発音を評価する課題だと知らせずに話してもらう。各学習者の発話の長さは47秒～3分16秒であった。
7　2人は言語聴覚療法士、1人は博士課程で音声学を専門とする大学院生である。
8　評価者1人のみが不自然だと指摘し、しかも不自然度が1点のものを除く。

5. 結果と考察

5.1. ロシア人の発音の不自然さの種類と傾向

ロシア人日本語学習者の発話音声データの評価を集計して、不自然さの傾向を図1の棒グラフにして示す。それによると、主な不自然さは7つの分野に分類され、特に「発話リズム」と「単音の音色」と「イントネーション」に関するものが多いことが明らかになった。発音が不自然であるという指摘が最も多かったのは「発話リズム」に関するもので、これらの不自然さは全体の約46%を占めた。「発話リズム」とは、音の繰り返しに関する音声特徴である。次に、「単音の音色」に関するものが多く、割合は約28%であった。「単音の音色」に関する音声特徴としては、母音や子音の音色が挙げられる。3番目に指摘が多かったのは「イントネーション」に関するもので、約19%であった。「イントネーション」は、文末などにおける音の長さや高さの変化・音調などを指している。
本研究では、「単音の音色」について、どのような音声特徴が不自然さに影響している

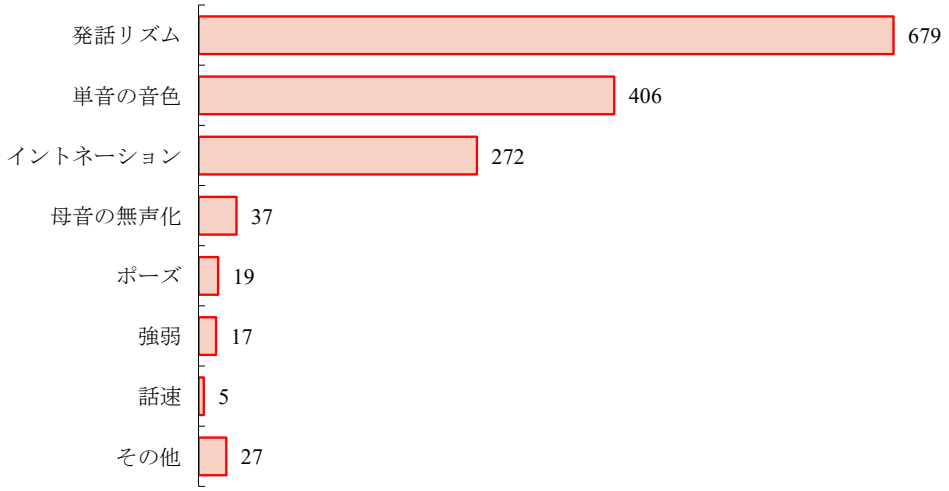


図1　ロシア人の日本語発音の不自然さの分類と傾向 (総出現数)

かを分析していく。単音の音色に関する評価の集計結果を、図2の円グラフに分類して示す。

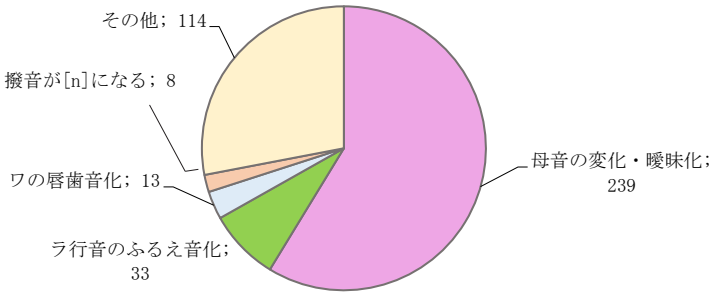


図2 単音の音色に関する発音の不自然さの分類と傾向 (総出現数)

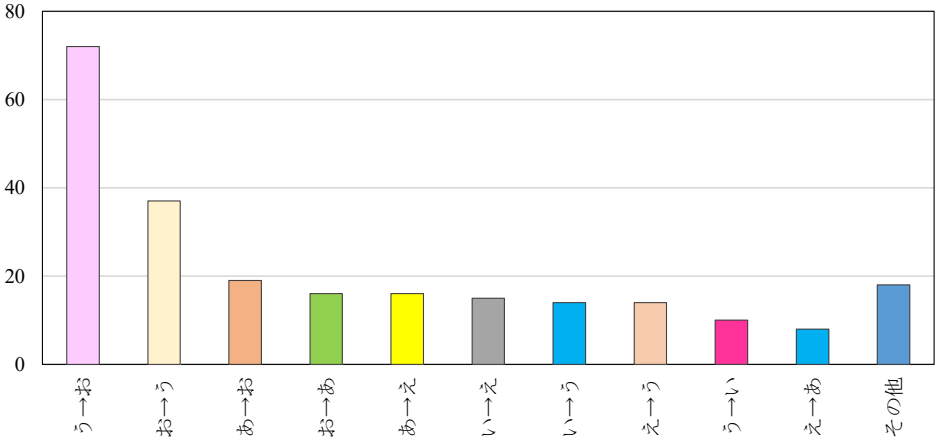


図3　母音の変化・曖昧化の種類と傾向 (総出現数)

図2に見られるように、単音の音色に関する発音の不自然さについての内訳は、「母音の変化・曖昧化」の現象が最も多く、約59%を占めることがわかった。
日本語の5つの母音に関しては、ロシア語にも同様の母音が存在している。ロシア語に存在しない音韻としては日本語のラ行の子音、ワの半母音、一部の撥音などがあるが、それらに関する不自然さの指摘は「母音の変化・曖昧化」に比べると多くないことがわかる。母音に関する不自

然さが最も多いという結果から、日本語には特に難しい発音がないので指導しなくてもいいというロシア人教師の主張は当たらないと言うことができる。ロシア語にも似た音が存在する、日本語の5つの母音の発音に不自然さが多いと指摘されたのは、ロシア人学習者が日本語の母音の発音を新しい学習対象として留意していないためではないかと考えられる。

さらに、母音の変化・曖昧化について詳しく見ていく。どの母音がどのように変化・曖昧化して聞こえるのかについて集計した結果を図3に示す。図3を見ると、「う」の発音が「お」に聞こえる (以下、「う→お」と記す)という不自然さが最も多いことがわかる。次に多いのが「お」の発音が「う」に聞こえる (以下、「お→う」と記す)というものであった。このように「う」と「お」の発音が互いに誤って聞き取られる現象については、次節以降で、さらに詳しく見ていくことにする。

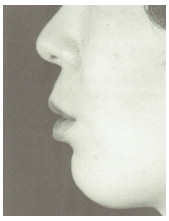
5.2. 日本語の母音「う」と「お」の違い

(1)口の形と開き

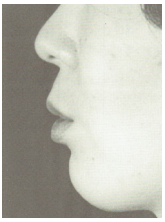
図4は、『日本語　はつおん』(1991)[9]　に掲載された「う」と「お」の発音の際の口の写真である。国際交流基金 (2009)[10] では、「お」の発音は「『ウ』よりももっと口を開いて発音します」と書かれているが、図4の写真を見ると唇の形や開きにはわずかな違いしかないことがわかる。そのため、実際に学習者にこれらの写真を見せて、「う」と「お」の口の形や開け方の違いを理解させるのは難しいだろうと思われる。

(2)舌の位置

次に、「う」と「お」の発音について舌の位置を確認する。図5は、『日本語　はつおん』 (1991)に掲載された舌の位置を横から見た図である。「う」の舌の位置は「お」より前方かつ上方にあるが、ロシア人の「う」の発音が「お」に聞こえるということは、すなわち



口の開き「う



口の開き「お」

口の開き「う」

口の開き「お」

9　国際交流基金日本語国際センター.　『日本語 はつおん』. 1991.

10　国際交流基金.　『日本語教授業シリーズ 第2巻 音声を教える』. 2009.

図4 「う」と「お」の唇の開きと形の違い (『日本語 はつおん』)

発音の際に、適切な「う」の位置より舌が後方かつ下方にずれているということになる。

「う」の舌の位置

「お」の舌の位置

図5 「う」と「お」の発音の際の舌の位置 (『音声を教える』)

言語の母語話者は、母語に存在する音韻を1つ1つ明確に聞き分け、発音することができる。それは、母語話者の脳内にはそれぞれの音韻の範疇が明確に設定されているからである。日本語母語話者が区別できる日本語の「う」と「お」の発音を、ロシア人学習者は明確に区別することができていない。つまり、ロシア人学習者は日本語の「う」と「お」の音韻の範疇が明確に設定されていないか、または範疇設定が不適切な状態であると言うことができる。
神山 (2012)[11] によると、ロシア語の[u]の発音は「アクセント下において基本母音8番[u]と同様の母音として発音」される。そして、ロシア語の[o]の発音は「アクセント下において基本母音7番[o]のやや広めの母音[o̞]として発音」され、「日本語のオにかなり近い」と述べられている。つまり、ロシア語の[u]は日本語の「う」より舌の位置が後方にあり、ロシア語の[o]は日本語の「お」の舌の位置に近いということである。
ロシアの高等教育機関で最も多く用いられている日本語の教科書『日本語1』[12]では、母音の発音についてどのように記されているのだろうか。教科書の冒頭には発音に関する説明があり、「う」の発音は「/y/と/ы/の間の音。唇を前方に突き出さない、唇を丸くしない、唇を両側に軽く引き、舌を後ろに引く」等と記されている[13]。日本語学習者は学習の初期に、このように教科書で母音「う」の発音の仕方を学んでいるが、おそらくその後は母音の発音を意識する機会が少ないため、発音する際に

[11] 神山孝夫『ロシア語音声概説』研究社、2012年。
[12] Нечаева, Людмила『日本語1』2006年。
[13] 筆者による翻訳。原文はロシア語。

注意を向けていない可能性がある。そのため、「う」の発音がロシア語の[u]の発音に近くなっているのではないだろうか。
また、ロシア語にはストレスの置かれない母音は弱化するという発音システムが存在する。その影響で、「う」にストレスが置かれない場合、舌の位置が下がり「お」のように聞こえるという可能性もある。このように、「う→お」の現象は母語における発音習慣が転移したことが原因であると考えることもできる。
しかしながら、「う→お」の現象の他に、「お」より舌を上方に持ち上げることによって「う」に聞こえる「お→う」という逆方向の現象も起こっていることから、単なる母語の習慣の転移だけでは説明がつかない。したがって、「う」と「お」の音変化は音韻の範疇設定と何らかの関係があると考える方が妥当なのではないだろうか。

5.3. 日本語能力レベル別に見た「う」と「お」の発音習得状況と範疇設定

ロシア人の「う」と「お」に関する不自然さの数について、日本語レベル別に1人ずつの平均を計算した結果を図6の棒グラフに示す。図6を見ると、「う→お」の不自然さは全体数が多いが、日本語能力が中級レベル以降はその数が漸減していく様子がわかる。一方、「お→う」の不自然さの数は中級前半レベルでは少ないが、中級前半レベルから中級レベルにかけて増加し、中級レベルから中級後半レベルにかけて微減し、上級前半レベルになると減少する様子が見られる。図6においてそれぞれのレベルの不自然さ数を点線でたどると、不自然さの数の変化の様子がよくわかる。習得の困難さという観点から考えると、不自然さの全体数の多い「う→お」の現象が中級後半レベルで大きく減少に転じる様子が見られることから、不自然さの総数が多い順に習得が困難であるとは限らないと言うことができる。
また、音韻の範疇設定という観点から見ると、学習者は中級前半レベルの段階で「う」の音韻の範疇が適切ではないと気づき、「う」の範疇設定を変えようと試みたと考えられる。その影響で、「う」と「お」の音韻範疇の境界が揺らぎ、それまで正しく発音できていた「お」の範疇が変化し、中級レベルの段階で不自然さが増す結果となったと考えられる。その後、中級レベルから上級前半レベルにかけて「う」の範疇設定が修正され、それとともに「お」

の範疇も適切な方向へ修正が行われたと解釈できる。

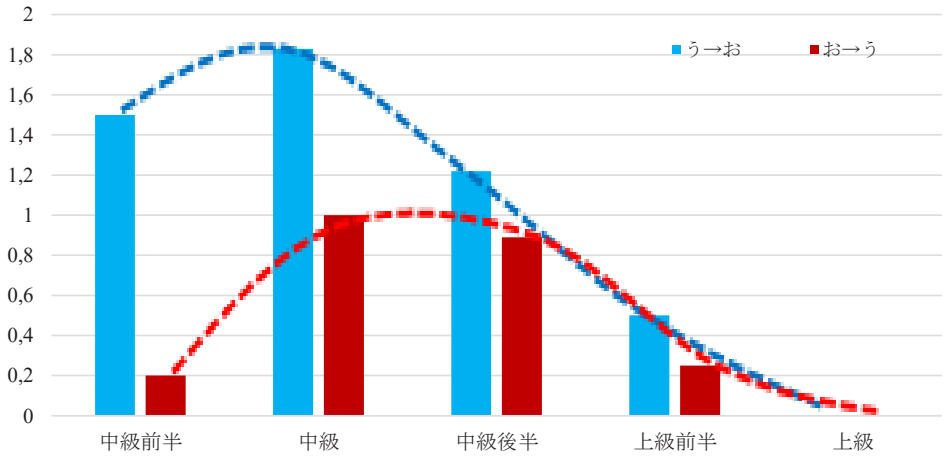


図6　日本語レベル別の「う」と「お」の発音の習得状況　(1人あたり平均数)

5.4. 上級前半レベル以上に表れる母音の不自然さ

上級前半レベル以上の高い日本語能力になっても表れる母音の発音の不自然さは、習得が最も困難な音声特徴である可能性がある。上級前半レベルの学習者にも表れる母音の曖昧さについて調べた結果、「う→お」と「お→う」、そして「あ→お」と「お→あ」の4つの現象が生じていることがわかった。それらの出現数を日本語能力レベル別にまとめて、表1に示す。これらは「う」と「お」、「あ」と「お」のように2つの音韻が対になっていることから、2つの音韻ごとに範疇の境界が適切に設定されていないことが原因ではないかと考えられる。
次に、これら4つの不自然さの現象に関して、日本語能力レベルごとに1人あたりの平均の不自然さ数を求め、図7の棒グラフにまとめた。「う」と「お」の音韻対については図6において検討したが、「あ」と「お」の音韻対に関しても図7のように中級前半レベルから上級前半レベルにかけて、学習者が音韻の範疇の修正を試みている様子が推察される。
中級前半レベルでは「あ→お」の現象が見られる一方で、「お」は正しく発音されていた。

表1　上級前半レベルの学習者に表れる母音の不自然さ (出現数)

	う→お	お→う	あ→お	お→あ
上級レベル　(1人)	0	0	0	0
上級前半レベル (4人)	2	1	2	2
中級後半レベル (18人)	22	16	7	2
中級レベル　(18人)	33	18	5	10
中級前半レベル (10人)	15	2	5	0

図7　上級レベルの学習者にも表れる不自然さ (1人あたり平均数)

学習者が「あ」の範疇を修正しようと試みた結果、「お」の範疇との境界が動いたために、中級レベルにおいて「お」が「あ」のように聞こえる現象が起きたと考えられる。中級後半レベルでは「お」の範疇は再びほぼ適切な状態になったが、上級前半レベルにおいてまた「お→あ」の現象が増加している。「あ」と「お」の2つの音韻範疇の設定は互いに影響し合い、片方の範疇が修正されると、もう片方の範疇もそれにつられて動くことが推察される。
図7において、レベルごとに不自然さ数をたどった緑色と橙色の点線が波打っている様子から、「あ」と「お」の音韻範疇の修正が常に適切な方向に進むわけではなく、範疇を修正し過ぎたために不適切に設定される段階があり、またそれを修正するという過程を経ていることが考えられる。しかしながら、上級レベルにおいては「う」と「お」および「あ」と「お」の音変化による不自然さが見られなかった。本研究の対象者には上級レベルの学習者が1人であったため一般化することは難しいが、これら2対の音韻の範疇は修正の過程を経て、上級レベルになると適切に設定される可能性がある。
これらの現象は、小熊　(2008)[14]の研究における音韻の範疇化プロセスの仮説を支持するものと考えられる。小熊によると、第二言語の音韻の習得過程においては、学習者の試行錯誤によって様々な音の変異が表れるが、その変化は一定の体系を持っていると仮定されている。本研究においても同様に、学習者の試行による音変化の過程が表れており、音韻の範疇化がそれに関わっていると考えられる。

14　小熊利江『発話リズムと日本語教育』風間書房、2008年。

6. まとめ

本研究では、ロシア人の日本語学習者の発音の不自然さに関して分析を行った。その結果、主な不自然さは「発話リズム」「単音の音色」「イントネーション」の3種類であることが明らかになった。さらに「単音の音色」の不自然さに関して詳しく見ていくと、母音の変化・曖昧化に関するものが最も多いことが明らかになった。母音の変化・曖昧化のなかでは「う」と「お」の音韻対の曖昧化が最も多く起こっており、次に「あ」と「お」の音韻対の曖昧化が多く起こっていた。これら2対の発音の不自然さは日本語能力が上級前半レベルになっても生じており、習得が困難な音声特徴であると言える。
このようなロシア人学習者による母音の変化・曖昧化の原因は、母語の音変化 (母音の弱化)の習慣による転移とも考えられるが、音韻の範疇化に関する音変化のシステムが関係している可能性がある。学習者によって不適切に設定された音韻の範疇を修正する過程で、対になった音韻の境界が揺れ動き範疇設定が互いに影響されながら変化する過程をたどることで、音韻の習得が進むことが推察された。

謝辞

本研究の実施においては、筑波大学留学生センターが開発したJ–CATを使用しました。J-CATの詳細は「http://www.j-cat.org/」をご参照ください。本研究の調査で用いた手続き、内容の一部については「海外連携による日本語学習者コーパスの構築―研究と構築の有機的な繋がりに基づいて―」 (JSPS 科研費 課題番号24251010代表者 迫田久美子)を参考にしました。また、本研究は「ロシア語を母語とする日本語学習者の音声習得研究―第二言語習得理論の構築のために―」 (JSPS科研費 課題番号16K02797代表者 小熊利江)、および「ロシア語母語話者の日本語音声習得に関する縦断研究」 (JSPS科研費 課題番号19K00701代表者 小熊利江)の助成を受けたものです。調査にご協力いただいた皆様に、心よりお礼を申し上げます。

参考文献

小熊利江『発話リズムと日本語教育』風間書房、2008年。
小熊利江「ロシア人大学生による日本語の発音習得過程―横断研究と縦断研究の結果から―」『日本語教育連絡会議論文集』31、日本語教育連絡会議、2019年、80–87頁。

小熊利江「ロシア人による日本語発音の不自然さの傾向―単音レベルの発音に着目して―」『日本語教育連絡会議論文集』33、日本語教育連絡会議、2021年、119–126頁。
神山孝夫『ロシア語音声概説』研究社、2012年。
国際交流基金日本語国際センター『日本語　　はつおん』凡人社、1991年。
国際交流基金『日本語教授法シリーズ　第2巻　音声を教える』ひつじ書房、2009年。
国際交流基金「ロシア (2019年度)」『海外の日本語教育の現状　2018年度海外日本語教育機関調査より』2021年。
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/russia.html.
迫田久美子、石川慎一郎、李在鎬『日本語学習者コーパスI–JAS入門』くろしお出版、2020年。
助川泰彦「母語別に見た発音の傾向―アンケート調査の結果から―」『日本語音声と日本語教育』文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」D1班　平成4年度研究成果報告書、1993年、187–222頁。
藪崎義雄「ロシアにおける日本語教育の現状と問題点」『創価大学大学院紀要』28、創価大学、2006年、149–172頁。
渡辺裕美「ロシア語母語話者の発音の特徴と指導における問題点―日本人日本語教師に対する調査から―」『日本語教育紀要』7、国際交流基金、2011年、71–84頁。
渡辺裕美、松崎寛「発音評価の相違：日本人教師・ロシア人教師・一般日本人の比較」『日本語教育』159、日本語教育学会、2014年、61–75頁。
The Phonetic Society of Japan. *A Grand Dictionary of Phonetics*. Tokyo: Pearl Island Filmsetters Ltd. 1981.
Нечаева, Людмила『日本語1』Москова, Московский лицей, 2006.

小熊利江：
東京外国語大学卒業、お茶の水女子大学大学院博士前期・後期課程修了。人文科学博士。専門は第二言語習得、日本語学、音声学。日本の他にアメリカ、エジプト、イギリス、ロシア、ベルギーにて日本語教育および研究に携わる。セッタ・オクトーバー観光学園大学講師、東京大学准教授などを経て、現在ルーヴァン・カトリック大学准教授。主な著書・訳書に『発話リズムと日本語教育』 (2008)、『学びのイノベーション―21世紀型学習の創発モデル』 (2016)など。